

戦いに荒廃したアフガニスタンの農地復興に捨て身で打ち込み、人々の敬愛を集めながら今月凶弾に倒れた中村哲医師(享年73)は、生前、活動の動機を問われるとこう答えたという。

「道で倒れた人を見たら『大丈夫か』と駆け寄るでしょう。それが人間共通の心だと思う」

「必要なのは100の診療所よりも1本の用水路」と直言して自ら実行し、成果に名も利も求めぬ姿に俠気(ぎやくき)を見いだす人もいる。



火論 ka-ron

二 研 木 玉

道に倒れる人あれば

損得に無縁、弱く困り果てている人に加勢(かぜい)する。そんな気風である。

祖父は玉井金五郎。明治から昭和

にかけて、石炭積み出しの港湾、

北九州・若松を拠点に、当時は「沖

仲仕」と呼ばれた労働者を仕切った

親分だった。組合を結成して、

機械化で人員整理を図る大手資本

にストライキで抵抗。地元最大勢

力の組織に屈せず、襲われて瀕死(ひんし)の重傷も負う。芥川賞作家、火野

葦平(1907〜60年)は金五郎

の長男で、その妹の子が中村さん

になる。写真を見ると、中村さん

は金五郎と驚くほど似ている。

金五郎と妻のマン、若松をめぐる

時代と人の盛衰は火野が戦後、

読売新聞に連載した小説「花と竜」

が活写する。何度も映画化、ドラマ化された。金五郎の行動力と義理堅さ、そして繊細な内面ものぞかせるこんな場面もある。

ストライキを切り崩し暴利を得

ようという敵方に単身乗り込み、

銃を突きつけて「スト賛成」の証

文を取る。だが金五郎は自己嫌悪

に陥り、こんな方法しか考えつか

ないでは「もはや、自分は軽蔑す

べきヤクザにすぎない」と泣く。

中村さんはアフガンの人々に深

く敬意を払い、苦楽を共にした。

キリスト教の新約聖書ルカ伝に、イエスが語る「よきサマリア人」という話がある。

旅人を強盗が傷つけ、着物を奪い去った。祭司が来て、道に

倒れる人を見ると道の反対側に移

り、通り去った。続くレビ人もそ

うした。しかし次に来たサマリア

人は、倒れている人を気の毒に思

い、傷にオリーブ油などを注ぎ、

家畜に乗せ、宿で介抱する。翌日、

宿の主人に金を渡して世話を頼

み、費用が余計にかかったら、帰

りに払うと言い残して去る……。

よき隣人になるには、相手の苦

悩や痛みを我が事として分かち合

い、共に負うてこそ、と読める。

中村さんはクリスチャンだが、

アフガンの宗教、文化、慣習、価

値観などを心から尊重した。まご

とに「よき隣人」であった。

クリスマスのわずかなひととき

でも、こうしたことには思いを致し

てはどうか。